実物大の「縄文のビーナス」作りに挑戦する受講生

縄文のビーナスのふっくら曲線再現

尖石縄文考古館 実物大で作る講座

茅野市の尖石縄文考古館は24、25の両日、市内で出土した国宝土偶「縄文のビーナス」を実物大で作る講座を開いた。県内外から16人が参加し、妊娠した女性を表したとされるふっくらした曲線を再現しようと、熱を込めて丁寧に作業した。

同館の土器サークルのメンバーが指導し、足から腰、胴体、顔、頭と粘土を積み上げていった。土器サークルの小平一次さん(84)は「曲線が豊かなので土偶の中では再現が難しい。文様が多ければそれなりに見えるが、縄文のビーナスは首から足元まで文様もない」と特徴を説明。受講生はサークルの用意した図面を参考にじっくり時間をかけて形作りに取り組んでいた。

毎年恒例の縄文教室の一環で、今年度も「仮面の女神」作りやカラムシを使った糸作りなどが計画されている。受講生が作った「縄文のビーナス」は同館で乾燥させ、10月に野焼きすることにしている。

（前田智威）